

サリユ Spiritual

VOL 2 2010 Autumn

7月25日のセミナー「自死遺族と仏教」の概要は大蓮寺ブログ「みとりびと」は、い〜にて、<http://mitoribito.blogspot.com/2010/08/blog-post.html>

「年間3万の 生き方を

なんとかしたいんです」。年間3万人という数字は、自ら死を選んだ人の数である。IT業界に長らく務め、4年前に退職した藤澤克己さん。生死を扱う僧侶として、仕事の経験を活かすことができると、自殺対策のNPO活動に従事した。

2007年5月、藤澤さんは「自殺対策に取り組む僧侶の会」を立ち上げ、「自死の問い・お坊さんとの往復書簡」や、追悼法要「いのちの日 いのちの時間」などを開催している。既に東京近郊では38人、大阪・名古屋・広島などにも賛同者がいて、超宗派のネットワークは徐々に広がりつつある。

自死遺族は悲しみの只中であって「なぜ止められなかったのか」などと責められる場合や「なぜ気づけなかったのか」と悩むという。「見守りと伴走が大切」とは藤澤さんの言。「本当の会の名前は“生きる支援に取り組む僧侶の会・自殺対策班”なあってね(笑)。そう、“生き方”を

支えたい」

<http://homepage3.nifty.com/bouzsanga/>

自殺対策に取り組む僧侶の会の活動はウェブにて



7月25日、大蓮寺・エンディングを考える市民の会との共催のセミナーにて講演いただきました。

藤澤克己さん

自殺対策に取り組む僧侶の会代表・浄土真宗本願寺派安楽寺住職・47歳





一人称で語る お寺の明日、 仏教の未来。

ネットの知恵、ホットな議論。



これまで、昔からの因習が根強い仏教界では、「伝統」「歴史」のバリアが強固で、若い僧侶によるイノベーションは困難な状況にありました。教団社会はしがらみの壁に囲われ、「若さ」の夢や希望はなかなか芽を吹かないのが実態でした。しかし、「若さ」による創造や改革のマインドを失った教団は、変動する社会への対応力を失っていきます。

一方で、教団社会の後退に入れ替わるように、上田紀行さんの「がんばれ仏教」(04)や高橋卓志さんの「寺よ変われ」(09)など、地域開発型寺院の活動への着目が顕著となってきました。関西でも京都の法然院、大阪の一心寺、そして僭越ながら應典院などが、多くの担い手によって地域資源として活かされ、独自の活動を展開してきました。

中でも、特に若者の創造的な表現活動の拠点となってきた應典院は、今、若い僧侶たちの超宗派の動きの拠点ともなりつつあります。「教団主導」ではなく「市民協働」を旗頭に数々の場づくりは、停滞する仏教界に「地殻変動」を引き起こしつつあるとも思えます。次代を担う青年僧侶たちがこの混迷の時代を仏教者としてどう生きていくのか、それは「社会参加仏教」ならぬ「若者参加仏教」の実践のはじまりといってもいいかもしれません。

2010年年初、サリユ・スピリチュアル発刊以降、
應典院では多彩な「若手僧侶」による語り場を創出。
3月には、7年にわたり13回開催されてきた「ポーズ・ビー・アンビシャス」が、
上田紀行さんを招き、はじめて関西で開催されることになりました。
また、6月には新企画「お寺MEETING」がスタート。
本号の特集では、それらの場集った若手僧侶らの語りをひもとき、
日本のお寺の明日と、日本仏教の未来を展望します。

Spiritual
Opinion

生者とのつながりを 確かなものに



白波瀬達也

Tatsuya Shirahase

関西学院大学大学院社会学研究科研究員・
大阪市立大学都市研究プラザGCOE特別研究員。1979年生。関西学院大学大学院在学中より釜ヶ崎を主たるフィールドに宗教社会学・福祉社会学の立場から宗教者・宗教団体のホームレス支援の調査研究を展開。

生者とのつながりを確かなものにするために 次代の僧侶たちの実践と課題

筆者は現代における宗教者および宗教団体の福祉活動を研究する宗教社会学者で、長らくホームレス支援の現場を調査してきた。ホームレスとは、単に家を喪失した人であるだけでなく、さまざまな社会関係を喪失し、帰属する場所を失った人でもある。

ホームレスは雇用の流動化や福祉制度の欠陥など、さまざまな構造的要因によって生み出されるものだが、多くの人々は労働意欲や社会適応力の欠如にホームレス化の原因を見出しがちである。それゆえ、ホームレスは公的なセーフティネットからも零れやすく、コミュニティからも排除されやすい。

現代日本のなかで最も苛烈な「苦」を経験しているといっても過言ではないホームレスを積極的に支援しているのがキリスト教関係者である。彼らの多くは教会という場を拠点にしたホームレス支援活動をおこなっており、神父や牧師といった聖職者だけでなく、信徒が参与することが一般的な傾向となっている。

また、キリスト教関係者によるホームレス支援は教会活動としてではなく、教会外の人々も参与するNPOとして活動しているところも少なくない。支援一被支援関係のなかでディスコミュニケーションが生じることもあるが、キリスト教関係者との出会いのなかで、精神的な「苦」が緩和されたり、路上生活から脱却できたりしたホームレスの話には枚挙にいとまがない。

一方、仏教関係者のホームレス支援活動は極めて少数しかない。大阪では2003年から「soul・in・釜ヶ崎—野宿者問題を考える宗教者連絡会—」という宗教者を中心としたネットワーク型組織が結成され、そこに数人の僧侶が関与し、釜ヶ崎の慰霊祭などに参加するようになっている。また、東京では浄土宗の有志僧侶を中心に「ひととじの会」というホームレス支援団体が2009年に結成され、都内で炊き出し活動や葬送支援をおこなっている。しかし、大半の寺院・僧侶はホームレス問題に関心である。私の知る限り、ホームレスの集住地の近くにある寺院はいずれも門を閉ざし、目の前にある「苦」に寄り添う姿勢を確認することができない。

ごく限られた事例ではあるが、この事実は「日本の仏教は生者の生きづらさへの対応に消極的である」という筆者の仏教イメージを形作ってきた。そして筆者は多くの日本人と同じように仏教を習俗あるいは観光資源とみなし、「生きた宗教」として考察することはほとんどなかった。

しかし昨今、十分に顕在化しているとは言い難いものの、旧来の仏教に対するイメージを覆すような実践が着実に生まれつつあるようである。事実、筆者が参加した應典院での2つのイベント「ポーズ・

ビー・アンビシャス関西」(2010年3月9日)と「お寺MEETING:開放系Vol.1 ネット世代は、寺院を変えるか」(2010年6月15日)は仏教の新たな動きをエンパワーしたり、可視化させたりする内容で大変興味深いものであった。そこで以下では上記2つのイベントの概要を紹介し、それらへの参加を通じて筆者が考えた現代日本における仏教の課題と可能性を論じる。

ポーズ・ビー・アンビシャス関西

ポーズ・ビー・アンビシャス(以下、BBA)は僧侶たちが宗派を超えて自らの悩みや思いをシェアすることを目的にはじまった集まりで、『がんばれ仏教! お寺ルネサンスの時代』(2004.NHK出版)の著者としても知られる文化人類学者、上田紀行氏(東京工業大学准教授)の呼びかけをきっかけに2003年から定期的に開催されるようになった。これまでBBAは東京を拠点におこなわれてきたが、2010年3月、東京のBBAとは別に関西においてもBBAが開催されることになった。

BBA関西の記念すべき第1回目は「次代の僧侶の可能性 —20年後、お坊さん、してますか?」という刺激的なテーマのもと、60余人の僧侶が集まった。彼らはイベントなどを通じた寺院の地域開放や、若い世代に仏教の魅力が伝わるようなコンテンツづくり(雑誌、ウェブサイトなど)など、独自性に富む活動をしており、複数の小グループに分かれたディスカッションの場において、各々の実践の可能性や限界について熱心に語り合った。

お寺MEETING:開放系Vol.1 ネット世代は、寺院を変えるか

BBA関西が主として今後の仏教の可能性を模索するための実験的な集まりであったのに対し、「お寺MEETING:開放系Vol.1 ネット世代は、寺院を変えるか」は、先進的な取り組みをおこなっているモデル事例の報告であったといえるだろう。本イベントではインターネットによって仏教(寺院・僧侶)と社会の関係がどのように変化するかを把握するべく、2人の若手僧侶が実践を紹介した。

ひとり目のスピーカーの松下弓月師は同世代の若手僧侶らと共同でインターネット寺院「彼岸寺」の運営に携わっている。彼岸寺は、法

3人の僧侶からレポート

如是我聞

「生者とつながり」を見出す若手僧侶達の挑戦。文中のBBA関西第1回の準備スタッフから2名、そしてお寺MEETING第1回の参加者からコメントを寄せていただきました。

教義を生きるものが場を開く

関本和弘 (融通念仏宗大念寺副住職)

東京でのBBAに何度か参加させていただくうちに、ぜひ、関西でも開催することができないかと思うようになり、ご縁をいただいた應典院さまに相談したところ、快くお引き受けいただくことができました。その甲斐あって念願の開催を導くことができました。ただ、いざ終ると不完全燃焼を感じました。議論が暖まってきて、これからというところでのタイムオーバー。これは第2回、第3回と続けていく必要性を感じますね。

若手僧侶が100人集まるという機会には、一つの場所に100人が入っていることも大事かもしれませんが、小分けの議論ができる環境こそが重要だと思うのです。今回、阿弥陀・勢至・普賢・大日・愛染・不動・地藏・観音と、いかにも僧侶の語りの場らしい名前でのグループ討議のリーダーをさせていただきましたが、とりわけ今回は僧侶とは「職業として生きる」のではなく「教義を生きる」という話で活発に意見が交わされました。

恐らく、回数を重ねるごとに、寺院や僧侶が目に見えて変わって行く可能性を秘めていると思います。ただ、東京に対して関西はどのようなかたちを見出して行くのかは、継続した議論が必要となるでしょう。

少なくとも関西では宗派を超えた集まりは、あまりない状況です。参加したい、というときに参加できる場があることが重要なので、例えば第1回がそうであったように、本番のための準備会を開き続けるなどの工夫はあってよいと思います。

事や祈禱を執りおこなうのではなく、独自の観点に基づき仏教(寺院、僧侶、仏教系イベントなど)の紹介を超宗派的におこなっている。ホームページには、個性的な活動をしている僧侶へのインタビューを掲載した「現代名僧図鑑」という人物紹介コーナーがある一方で、精進料理のレシピを掲載した「禅僧の台所 ～大人の精進料理」という料理コーナーもあり、仏教に造詣の深い者からそうでない者まで、幅広い読者を魅了する内容となっている。

ふたり目のスピーカーの今城良瑞師は、インターネット上で「生きづらさ」を抱える人々の援助をおこなっている。今城師は日本最大のソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)として知られるmixiのコミュニティ「言えない心の傷」の管理人を担っており、日々寄せられる不特定多数の人々の「書き込み」(メッセージ)にレスコメント(返事)をつけている。実際に「言えない心の傷」を閲覧してみると、われわれの日常生活では顕在化しにくい「負の感情」が吐き出されており、その生々しさは目を塞ぎたくなるほどである。「言えない心の傷」には約25,000人ももの登録者がおり、同コミュニティのニーズの高さを窺い知ることができる。今城師は同じくmixiに「ネットからリアルへ」というコミュニティをつくり、インターネット上だけでなく現実の出会いを通じた問題状況の克服を模索しているが、こちらの登録者は50人に満たない。このことは個人の問題状況を一人で抱え込みがちな現代社会の特徴をはっきりと指し示しているといえよう。今城師は、インターネットを通じて「生きづらさ」を抱えた多くの人々に出会いつつ、彼らの「苦」に直接的に関与していくことの困難に向き合っている。

松下師と今城師の実践は、インターネットを活用することで多くの人々の関心を集めることに一定程度成功しており、死者供養とは異なる回路で仏教と出会う可能性を生み出しているといえるだろう。ただ、両者の事例は共にインターネット上でつながった人々との出会いを深化させることが困難であることも示唆していた。その一因は彼らの実践が本業として位置づけられておらず、時間的・経済的制約のなかでおこなわれているからだといえよう。「彼岸寺」や「言えない心の傷」、「ネットからリアルへ」は興味深い実践だが、仏教界の動きとしてはまだまだ周辺的なものでしかない。このような状況を鑑みるとき、筆者は「ネット世代」の僧侶たちの活動が寺院のあり方を変革するレベルに達するまでにはもう少し時間がかかりそうだと率直に感じている。

檀家システムの崩壊

筆者が應典院の2つのイベントに参加して強く感じたことは、仏教と生者との日常的つながりが極めて弱いということ、そして、それゆえに生者の「苦」に真正面から応答することが困難だということである。宗教への参加の仕方を社会的にみると、「帰属集団を通じた慣習的・義務的参加」と「個人の信仰に基づく自発的参加」に大きく分けることができる。仏教の場合、これまで多くの人々が前者に位置づけられてきた。しかし、社会が近代化し、流動化するにつれ、イエや地域社会といった帰属集団を通じた仏教との関わりは著しく希薄化した。ま

た、強固な檀家制度と結びついた仏教諸教団はこれまで長らく死者供養に関する儀礼を中心におこなってきた。このことによって多くの寺院は人々の悩みや救いの要求を受け止める場ではなく、「個人の信仰に基づく自発的参加」はもっぱら新宗教など、伝統仏教の外部においてみられるようになってしまっている。

神宮寺(臨済宗妙心寺派)住職の高橋卓志師は、自著『寺よ、変われ』(2009,岩波書店)にて、伝統仏教は、あまりに長く、あまりにも怠惰に檀家システムの上に胡坐をかいてきたために時代に沿った改善や、時代に対応する新しいシステム構築ができていないと述べている。そして、一気に檀家システムが崩壊に向かっていく可能性がある。と警鐘を鳴らしている。高橋師は仏教の危機的状況を打破するための方策として、寺院が檀家との関係を生前、ないしは死の周辺からもち、故人の生き方を反映した丁寧な葬儀をおこない、適切なグリーフ・ワークを施すことを提唱している。

しかし、かつてと違い、寺院・僧侶との慣習的・義務的な「お付き合い」が緩やかになるなか、人々が檀那寺(菩提寺)の僧侶に葬儀を依頼することは当然のことではなくなりつつある。また、無宗教式の葬儀の台頭は、仏教の存在意義をますます危うくしている。このような状況下で人々と寺院・僧侶との関係を再構築するためには、葬儀・法事を丁寧におこなうだけでなく、生者とのかかわりを創造するための実践も必要になるだろう。

生者と向き合うために

今日の寺院の多くに共通する課題は、イエ・地域に否応なく埋め込まれた「お付き合い」としてのかかわりを乗り越え、個人人の意思に基づいた自発的なアソシエーションの側面を付加していくことではないだろうか。そのためには、檀家以外のアクセスを容易にする「間口の広さ」が重要になるだろうし、従来の檀家を引き留めつつ、新たに寺院に埋め込まれていなかった人々を惹きつける「奥行き」の深さをも



BBA関西第1回・中間ふりかえりの一風景(2010年3月9日)

如是我聞

伝えていく者として

飯田友子 (真言律宗西願寺副住職)

第1回のBBA関西では、多彩な地域・宗派の若手僧侶が集い、語り合うことで、在家の方々が僧侶に対して実に多様な期待を抱いていることがわかりました。例えば学校の教師、ソーシャルワーカー、医師、漫談家、臨床心理士、看取り、マザーテレサ等のカトリックの神職と同等の活動、篤志家などです。

秋田に住職から、「布教者＝(寺院)事業者の立場の突破」というお言葉を聞きましたが、私もこの事を皆が根底に考えて(抱えて)いると思います。その一方で、在家の方はこの点をあまりお考えではないと感じています。

僧侶が社会からの期待に応えよう、流れに乗らなくては、と焦る人も居るでしょう。その際、大きな期待に応えようとするだけになってしまったりは空回りをしてしまうと思います。改めて、それぞれの僧侶が自分に向いたスキルを使っただけのスタイルで、それぞれが社会に貢献できればよいとも考えました。

今回は11月7日に、浄土宗西山深草派総本山誓願寺で開催と伺っています。中心となるのは、京都の仏教系の大学に学ぶ学生たち。学生らしさを出してもいいですが、受付などでは、スタッフの顔をきちんとし、運営にあたってもらえることを願っています。

身近な場所から始まる
ネットワーキング

西 央成 (浄土宗大連忌事務局)

世襲が大半のネット世代僧侶は、生まれながらにして特定の宗派の僧侶になることがほぼ確定し、個の時代を生きているから組織への帰属意識が若干弱くなっている。宗派を超えた活動が増えているし、ネットというツールはそれを加速させる。あるアンケートでは、世間がこれからの仏教や寺院に期待することは「社会貢献の活動拠点」とのこと。ネット世代は、核となる宗教活動のほか、様々な社会課題と向き合うことが要求されるし、向き合うべきだと思う。ちなみに私は、自分の寺の周りで子育て支援の要望が増えていることから、ぜひそれに取り組みたい。

宗派の僧侶として活動するわけではないという意見があった。それも理解できる。私は、ネットがどこまで宗派という組織を融和させていくか、反対にどのラインまでが譲れないのか、これからの時代にそれはどこまで必要かに興味があつた。私は、大切なことは融和していく中でしっかりと自分にあった信仰を持つことだという意見に共感した。個の時代の寺院の姿や可能性、次回以降も楽しみにしています。

必要になってこよう。

たとえば、名古屋市の大雄山性高院(浄土宗)は寺院を活用して、経済的な理由で塾に行けない子どもを対象にした学習補助事業や、住居を喪失した人々への宿泊事業など、現代社会の「苦」に向き合う活動をおこなっている。そしてこれらの活動を通じて多くの人々が継続的に寺院に集うようになっている。性高院のように寺院が生者の「苦」の問題に取り組むようになると、自らがもつ人材、財源、知識、空間などの限界に気付かされる。そのことが他者・他機関とのネットワーク形成のきっかけになる。そして寺院が新たな関係を構築し始めたとき、今度は社会の側が寺院に果たすべき固有の役割を示してくれるようになる。

しかし、実際に性高院のように寺院を地域に開くことは、長い年月をかけて培われてきた寺檀関係のもとに成立してきた寺院の在り方を揺さぶるものとして躊躇されがちである。檀家もまた、これまで通りの活動を維持していくことを寺院・僧侶に求めることが少なくない。この消極的な態度は、仏教的価値を重んじるどころから発せられることは少なく、多くの場合は面倒を避けたり、自分たちの「財産」を他者から守ったりするような意識から生じていると思われる。現実には大半の檀家は明確な信仰者ではないが、寺院が存続するために不可欠な「スポンサー」である。したがって、寺院・僧侶が仏教的価値観に則った活動を展開しようと試みても、同じ理念を十分に共有できていないので、檀家の思惑との間に齟齬をきたしやすい。このようなねじれた構造が寺院活動を窮屈にしてきたともいえよう。

冒頭で述べた仏教関係者のホームレス支援活動がほとんどみられない理由も、その活動が檀家から支持されないという理由に基づくことが多い。寺院が従来とは異なる活動を展開しようとするときに問われるのは、僧侶の強い意志と信念、そして檀家の合意を取り付けるに足る信頼関係であろう。これらを顧みず、檀家の反対を理由に新たな課題に背を向けることは寺院・僧侶の怠慢・努力不足ではないだろうか。

寺檀関係のほころびや葬儀の多様化などを背景に仏教の危機がしばしば論じられる一方、彼岸寺の事例が示すように、個人が自由に仏教に触れる機会は飛躍的に増大している。したがって、筆者は現在の状況を仏教再興のチャンスと捉えることもできるのではないかと考えている。宗教不信が顕著な現代日本社会においても、仏教は「伝統」という圧倒的なアドバンテージを有しており、社会的信頼を獲得する潜在力がある。

財政難を受けて公共サービスがどんどん脆弱になるなかで、仏教が公共性を復権する素地は整ってきつつある。すなわち、寺院を「空間資源」と位置づけ、市民活動や社会活動をエンパワーする場にリ・デザインしていただだけでも仏教が大きく変化していく可能性に直面しているはずなのだ。その一方で、これまでとは違い、これからは、人々が寺院・僧侶を選ぶ時代になっていくと予想されるため、社会のニーズに鈍感な寺院はますます淘汰されていくだろう。20年後、仏教が「生きた宗教」として再生しているか否かは、現状に危機感を募らせている次代の僧侶たちの開拓的実践に大きくかかっている。

book guide

フリーライター 田中市三 の

仏書探訪

寺よ、変われ

江戸時代くらい「伝統仏教は、あまりにも長く、あまりにも怠惰に檀家システムの上に胡座をかいていた」ので「時代に沿った改善や、時代に対応する新しいシステム構築ができていない」と嘆く。1978年、ニューギニア西部にアク島に慰霊行した著者は初めて「死の風景」と出逢った縁起により、大乘仏教はいま何をなすべきかの原点に立った。爾来「日本仏教」再生への眞摯な問い掛けと行動が続く。仏教の社会参加に正面から挑む姿は積極的能動的で勇気と智慧に満ちている。変革の元は常に自己改造に始まる。少子高齢化社会でのホンネの生き方、医療・環境問題にも鋭く切り込み、「伝統仏教が『葬式仏教』と揶揄され」人の死が「葬儀社主導」となった現況にレツドカードも、本書は「瀕死の寺の再生」に尽す勇猛果敢な人生と社会変革の書だ。

高橋卓志 著
●岩波新書(870円+税)



がんばれ仏教！
—お寺ルネサンスの時代—

伝統仏教こそ日本人の「心の遺伝」を受け継ぐ「かけがえのない故郷」だが、現状は「葬式仏教」専門のネガティブな姿を晒している。この「かけがえのない伝統仏教」をポジティブな存在に戻したい。自「お寺ルネサンス塾」を開催し、そのためにも著者は6人の僧と寺院への巡礼に出た。神宮寺、應徳院、青松寺、法然院、福聚寺そして有馬実成。そこで出逢った僧侶たちはみな、一度はネガティブな人生と向き合ったことで「かけがえのない自己」と故郷」を発見、脱皮した。その「論理を超えた」体験を詳細に紹介しつつ「現代の(ホトケ)探しは「い」ど『故郷喪失者』となった私たちが、再び私たちの生きる共同体を形づくる過程」と認識し、その縁起の中に日本の伝統仏教の可能性を視る、それはまさに「捨てたものじゃない！」と。

上田紀行 著
●NHKブックス(1,160円+税)



社会をつくる仏教
—エンゲイジド・ブッティズム—

1963年、タイの高僧アイク・クアン・ドックが焼身供養をした。カバーデザインにその衝撃のシーン。日本語に定着していないエンゲイジドとは「行動する」「社会参加する」「闘う」と訳され、閉鎖的なスピリチュアルを抜け出しソーシヤルな側面が強調される。著者は鎌倉新仏教の法然親鸞の社会性を見直し、近代では「歎異抄」を再発見した清沢満之、真宗実践派の高木頭明京極逸蔵らが果たした仏教の社会参加を振り返りつつ、「宗教はややもすれば、愛国(心や仲間意識)の補強、体制の擁護、個人的な癒しに終るけれど本来はそうした国家や民族、利害を守るための共同体を相対化し、人間がもっとも人間的に生存できる世界」の構築をめざすがエンゲイジド・ブッティズムだと結語する。

阿満利磨 著
●人文書院(1,800円+税)

なぜ寺院は
公益性を問われるのか

2007年、臨床仏教研究所が創設された。その社会的背景に二つの喫緊の課題があつた。一つは葬式仏教への危機感。もう一つは寺院活動の公益性に伴う優遇税制の漸次撤廃への方向性。この時代の流れをシンポジウムと論文で現状分析し、今後の活動形態を示唆する。まず現役僧侶NPO活動家、学者らによって「寺院公益性」の現状報告と提言がなされる。教育・医療・家族と社会倫理の崩壊、地域「ミニシティ」の復活、環境問題など社会に山積する課題をどう受け止め、公益性を念頭にどう展開していくかを討議。論文では死者供養・先祖崇拜などの祈りの公益性、それに伴う葬式仏教の役割、世俗面の再評価、タイ社会の仏教活動に見る日本仏教のあり方などが提言され、公益性と寺離れを追求していく。

全国青少年教化協議会
附属臨床仏教研究所 編
●白馬社(1,800円+税)

ネット世代は お寺を 変えるか?

仏教の“リアル”は今どこへ

取材・文 杉本恭子

2010年6月15日、應典院の新企画『お寺MEETING』第1回が開催された。ゲストはNPO法人『HAPPY FORCE』理事長の今城良瑞さん、超宗派仏教徒によるインターネット寺院『彼岸寺』を運営する松下弓月さん。いわゆる“ネット世代”にあたる僧侶たち。自らを“アナログ世代”と呼ぶ秋田住職による進行のもと、ネットを活動の場として利用する僧侶たちの“リアル”な関係性を問う議論が展開された。



日本仏教を“開く” 二つの世代の出会い

お寺といえば仏像や庭ばかりが目されるけれど、お坊さんと話すことも面白い!——雑誌等の寺院取材で会うお坊さんたちに惹きつけられた私が、お坊さんインタビュー企画を『彼岸寺』に持ち込んだのは約1年半前。これまで、「何かしら社会に直接つながる活動をしている」宗派も年齢もバラバラな20人以上のお坊さんたちに、「なぜ僧侶になったのか」「僧侶としてやりたいことは？」など、シンプルかつストレートな質問をぶつけてきた。

大ざっぱに考えると、私がお会いするお坊さんたちは、『がんばれ仏教! (上田紀行著、NHKブックス)』で取りあげられた秋田住職をはじめとする団塊世代前後のお坊さんたち、そして彼らの切り拓いた地平から生まれた、いわば“がんばれ仏教二世”とも言える若いお坊さんたちに分類できるように思う。今回の座談会は、まさに『がんばれ仏教!』に登場した秋田住職が、“がんばれ仏教二世”にあたるふたりの若いお坊さんたちをゲストに迎えて実現したもの。現代の日本のお寺、あるいは日本仏教の可能性を信じて挑戦するふたつの世代が、顔を合わせて語り合うちょっとした歴史的瞬間でもあったのではないだろうか。

壇上に上られた3人のお坊さんは、すでに『坊主めぐり』でインタビューの機会をいただいた方

ばかり。「今、自分は僧侶としてこれをやるしかない」という強い思いを持ってそれぞれに活動されていることは既知である。僧侶とは、寺院とは、そして仏教とは? 現代に生きる僧侶にとってのメディアとは何なのか。50代、30代後半、ジャスト30歳と約10年ずつの年代の違い、僧侶になった背景の違いもあり、幅広く多層的なテーマを持つスリリングな議論が行われた。

消えゆくリアル/ バーチャルの境界

まずはじめに、秋田住職から『アナログ世代』と『ネット世代』という議論の軸が提起された。秋田住職は、ブログやTwitterなどを利用しながらも「やはり自分はアナログ世代」だと言い、ネット上の関係性にひそむ闇が引き金になって起きた秋葉原事件を例に挙げて、「ネットは善のツールになりうるのか」と疑問視する。應典院という現実の場に拠点を持つ秋田住職と、お寺に勤めながらもネット上に活動の拠点を置いているふたりのゲストの間には、ネットへの関わり方にも当然違いがある。ネット世代の二人は、ネット上の関係性やコミュニケーションをどんな風に捉えているのだろうか?

虐待、性犯罪被害、DV、リストカット……誰にも言えない心の傷を抱えた人たちが集まるネット上のコミュニティを管理する今城さんは、「誰にも知られずに気持ちを吐き出したいとき、ネットの匿名性は良い方向に作用している」と言う。コミュニティの参加者数は約2万5000人、これだけの人数が集まるのは「ネットの間口の広さ」ゆえのことだ。しかし、「苦しみを言葉で書くことで気持ちは整理されても、根本的な問題は解決できない」との思いから、「もうワンステップ行きたい人のために」ネットからリアルに出て話し合う場も作られている。

80年生まれて「ネットのない生活をしたことがない」松下さんは、「ネットは使い方次第。ネットと同じかそれ以上に、現実空間にも危険はあるのでは」と反駁。さらには、リアルとバーチャルを二分化する捉え方そのものに疑問を投げかける。ここ数年の流れのなかで、ネット空間は実名を前提としたネットワークをも取り込み、リアル/バーチャル双方のコミュニケーションを融合するツールになりつつあることを指摘し、若い世代は「リアルとバーチャルの境界を意識しない」と話す。

かつて、目に見えない相手と匿名で言葉を交

ブログやTwitterも使うが、基本はアナログ世代。メディアは組織を保持するためのものと捉える。



應典院 秋田光彦住職

浄土宗・大蓮寺住職・應典院代表。1955年大阪府生まれ。明治大学文学部演劇学科卒業。情報誌『ぴあ』、映画プロデューサーを経て30代で加行。浄土宗教師として『教化情報センター21の会』事務局長として、数々の宗教イベント・メディアのプロデュースを手がける。97年、大蓮寺塔頭・應典院を、NPOを若いアーティストの拠点として再建。共著に『生命と自己』(慶應義塾大学出版会)『地域を活かすつながりのデザイン』(創元社)など。【應典院】<http://www.outenin.com>

ネットの間口の広さは認めるが、根本的な問題解決にはリアルでの出会いが必要。実はネットは嫌い。



NPO法人HAPPY FORCE代表 今城良瑞さん

高野山真言宗・某本山職員。保護司。1971年大阪府生まれ。1989年、高野山大学仏教学部密教学科入学。同年高野山真言宗総本山金剛峯寺で得度。1993年、高野山専修学院にて加行。2005年、NPO法人『HAPPY FORCE』を設立、理事に就任。2008年から理事長に。mixiのコミュニティ『言えない心の傷』の管理人。著書『ボクらの仏教 毎日がラクになるヒント』(PHP)。【HAPPY FORCE】<http://mikyoku.com>

リアル/バーチャルの境界線を意識せず関係性を作り、コミュニケーションする。ネットでの発言はメモする感覚。



彼岸寺 松下弓月さん

東寺真言宗・宝善院副住職。1980年神奈川県生まれ。国際基督教大学教養学部人文科学科卒業。青山学院大学大学院英米文学専攻卒業。東寺伝法学院にて加行・灌頂。超宗派の僧侶達が集うウェブサイト「彼岸寺」の運営に関わりながら、個性的な活動をする僧侶たちとのネットワークを広げる。虚空山彼岸寺著『お坊さんはなぜ夜お寺をぬけたのか』(共著、現代書館)。【彼岸寺】<http://higan.net>



わず“うさんくさ”をまとっていたネット空間は、リアルな関係性、コミュニケーションを取り込み、ソーシャルメディア化する流れにある。ならば、これからのネットにおいて、僧侶に問われることとはいったいどんなことだろうか。

ネットは僧侶を「個人」にする

宗派、教団という組織のなかでもがきながら、自らの立ち位置を見いだすなかで應典院という場を作り、育ててきた秋田住職は「それでも僕の基本は組織にある」と言う。葬儀をせず、檀家は持たない。“劇場型寺院”という孤高なまでの独自の在り方は、組織との相克なしには生まれなかったかもしれないと思う。

しかし、今城さんは在家生まれの僧侶で、現在は本山寺院に勤務。松下さんは寺院に生まれながらも「跡を継ぐ」ためではなく、自らの生の在り方を問うという動機から僧侶になったという。彼らふたりはそれぞれの背景から、個人として僧侶であることを選んでおり、「宗派」「寺院」を背負うことに絶対的な前提を置いていない。「組織との緊張関係のなかで個人として立つ」という選択を迫られた秋田住職とは違い、彼らは宗派を含む組織は自らを構成するひとつの属性として捉えているのではないだろうか。

この“違い”は、自ずとメディアに対する考え方にも反映されている。秋田住職にとって、ネットを含むメディアはあくまで「組織を保持するためのもの」であり、いかなるときも、個人としての“秋田光彦”ではなく、あくまで“應典院代表・秋田住職”としての言葉が重ねられていく。たとえば、ブログで発表する文章も、あくまで“秋田住職”とし

ての立場から「伝える」ことに重きを置いて、緻密に練り上げて書かれている。ところが、ゲストのふたりはネットにおいてもあくまで「個人」としてふるまう。公的な立場が求められる場合はその限りではないが、ふだんは気さくな話し言葉を使ってコミュニケーションをする。さらに、松下さんは「ネットは好きな時に思いつきをメモするノートのようなもの」と言い、ネットで「発信する」ことへの心理的な壁はほとんどないようにさえ見える。

これは、ネットと従来の“アナログメディア”の違いにも重なり合う。アナログメディアは、公益性を前提として組織の意見を集約してきたが、秋田住職の言葉を借りれば、ネットは良くも悪くも「個人が剥きだし」になるメディアだ。これまで、宗派や教団内での立場で位置づけられてきた僧侶もまた、ネット上では「個人」であらざるを得ない。そう考えると、個人として僧侶の道を選んだふたりが、ネットと高い親和性を見せるのは自然な成り行きなのかもしれない。

「お寺」とは何だろうか？

「個人」として仏教を選んでいる僧侶は、寺院を持つことを「僧侶であること」の前提とはしない。俗世間から見れば「お寺を持っていないお坊さんは、どうやって暮らしていくの?」と不思議に思うかもしれないが、そもそも僧侶になるというのは仏道に入ること。発心なく、お寺を存続させることを目的として僧侶になるほうがよほど不

思議だ。日本仏教の抱える問題のひとつは、巨大な宗派教団があるにもかかわらず、仏教において僧侶は何をする人なのか、お寺は何のためにあるのかといったごく基礎的なことが、一般の人に伝わりにくいことだと思う。

印象的だったのは、秋田住職から「お坊さんとしての今城さんの軸は?」と問いかげられたときの今城さんの答えだ。「目の前で困っている人がいたら、その人に対して何ができるかを考えるので教義は頭に浮かばない。ただ、僕の持っているもので伝えようとする、僕には仏教しかないんです」。

いつだったか、あるお坊さんに「お寺とは『仏』『法』『僧』(三宝)のある場所です」と教えられた。立派な伽藍や国宝級の仏像を見るのは確かに楽しいが、そこに仏教を生きる僧侶がいないのなら、それは本当に「お寺」と呼べるのだろうか? 應典院のホール型の本堂が「劇場」ではなく「お寺」になりえるのは、仏教を生きる秋田住職の強い覚悟によってである。日々、應典院に集まる人々と秋田住職の間に生まれ育つ関係性こそが『仏』を感じさせ、『法』を伝える回路を開いているのだ。同じように、「仏教しかない」という覚悟を持つ今城さんのいる場所は、ネットであれリアルであれ「お寺」になりえるのかもしれない、と私は思う。

ネットが問う日本仏教の在り方

世界中のあらゆる地域に接続し、そこにいる人たちとのコミュニケーションの場となるネットでは、日本はもちろん世界中の仏教徒間の交流も行われている。松下さんもまた、そこに参加するひとりだ。ネットで中継されるダラムサラでのダライラマ14世法王の講義に耳を傾け、『Twitter』を介して他宗派の僧侶、あるいは国内外の在家仏教徒と議論をしながら、一人の仏教徒という立場で発言する。松下さんは、こうしたネットを利用したコミュニケーションや『彼岸寺』での活動を「自己の研鑽の場」として位置づけ、「ネットであれリアルであれ、自分が試される場を設定して話すことによって、最終的には自坊のお檀家さんに何らかの還元をしていけるのでは」と考えているという。

私もまた、ネット上で行われるお坊さんたちの議論をしばしば目にするが、そこでは「〇〇宗の僧侶」という肩書きよりも、仏教に対する考え方や他者と言葉を交わすときの態度から「このお坊さんはどんな人なのか」に興味を持つことが多い。

このような状況について、秋田住職は「いままで宗派／教団という組織への所属で語られてきた僧侶は、ネットによってソロ活動が可能になっている」としたうえで、「ネットという場でそれぞれのお坊さんが“ソロ”として活動しはじめることによって、従来の仏教界の制度は変えられていくのだろうか?」と問いかけた。

ゲストのふたりは「(ソロ活動は)やりたい人だけやればいいと思う(今城)」各教団には長い歴史があり、守るべき大切なものがあるので変えるべきとは考えない(松下)」と答え、宗派／教

団に対して一定の距離を置く。さらに、松下さんは「仏教徒という枠組みのなかで、やりたいことがある人と一緒に動いていきたい」とも言う。

以前、秋田住職は「お坊さんは、仏教の入り口。そして、お坊さんは肩書きでなく生きざまだ」と話してくれた。社会の中で“仏教徒”である自らを問うお坊さんの仏教は、その“生きざま”を通して「リアル」に伝わり、仏教をまだ知らない人にも共感を呼ぶはずだ。そこには、新しい日本仏教の潮流を生む可能性が見えないだろうか?

ネットは寺院ではなく仏教を変える

前述のように、誰もが参加できるネット上の議論には、僧侶のみならず在家仏教徒や仏教に関心を持つ人たちにも開かれている。ネットの本格的な普及から約15年、今はまだ高齢者の利用者は少ないが、今後は確実にネット人口も高齢化する。ネットを介して、僧侶や寺院の在り方を問う議論が行われ、寺院に変革を促すこともあるかもしれない。

しかし、ネットは言論の場である以上に関係性を補強するツールとして意味を持つ。ネットでは、共通の関心や目的を持つ人を見つけやすく、つながりやすい。ネットワークは同じ志を持つ者を集め、自然発生的に成長していく。すでに、今城さん、松下さんをはじめとする若い僧侶たちの宗派を超えたゆるやかなネットワークは、「がんばれ仏教!」世代たちとの縦のつながりにも広がりつつある。今回、新しい寺院の在り方と仏教の可能性を提示し続けてきた應典院で、秋田住職が若い僧侶との対話を試みられたことも、そのような動きのひとつだ。

また、ネットには関係性間の距離を引き寄せる作用もある。お坊さんや仏教に興味を持ちながらも近寄りたく感じている人たちも、ネットでなら距離を縮めやすいのだ。今城さんのように「自分には仏教しかない」という覚悟のある僧侶が集まり、「仏教を一緒にやりませんか」とネットで呼びかければ、必ず共感する人が集まってくるはずだ。そこに、僧侶／僧侶でないを問わずに、“仏教徒”という同じ“地平”を共有して仏教を伝えあい実践する、新しい仏教のムーブメントが生まれまいだろうか。

新しい仏教のムーブメントが大きくなれば、人々の寺院に対する意識を変えるだろう。寺院側もまた、今までの方法を見直したり、「どんなお寺になりたいか」を考えるヒントを見つけるかもしれない。ネット世代、あるいはネットは、寺院を直接変えることはなくても、寺院をめぐる状況や日本仏教のスタイルを変える動きを加速する可能性はある。これから10年後、20年後のお寺やお坊さんは、いったいどうなっているだろうか? まだまだお坊さんからは目が離せそうにない。



杉本恭子／すぎもときょうこ
1972年大阪府生。同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。同大学院文学研究科新聞学専攻修士課程修了。ネットコミュニティ運営・ウェブサイト編集等を経て、京都をベースに取材・執筆を行うライターに。現在『彼岸寺』ウェブサイトにて「坊主めくり—現代名僧図鑑」と題したインタビューを連載中。
<http://higan.net/blog/bouzu/>

リアル化するインターネット

かつてはネットといえば匿名の高いメディアだったが、実名を前提とするソーシャルネットワーキングサービス(SNS)の普及以降は、ネット上と実社会のプロフィールを一致させる人が急増した。ネットはリアルな関係性を補強するツールとして利用する価値があると考えられたからだ。この流れは、近年のネットのソーシャルメディア化に伴って加速し、ネットにリアルな関係を取り込みつつある。

【ソーシャルメディア】

□□サイト、Q&Aサイト、『mixi』、『wikipedia』、『Youtube』など、いま、私たちが日常的に利用するサイトのほとんどは、ソーシャルメディアと呼ばれるものだ。個人が情報を発信し、不特定多数からレスポンスをもらうことができ、そのやりとりも含めてメディアを形成していく。また、ソーシャルメディアでは、参加するユーザーの間のつながりが把握できることも特徴だ。

アメリカのマイクロブログサービス『Twitter』も、昨年の日本上陸以来爆発的にユーザーを増やしている。「今何をしているのか」を140字以内の言葉でつぶやけば、呼応するように返信が返ってくるのが楽しく、他のソーシャルメディアとの関連付けが容易なことも人気の理由だ。

今回の座談会に参加した4人のお坊さんたちも『Twitter』を利用しており、仏

教に関することから日記的な内容まで、さまざまなことを発信されている。『Twitter』で見ていると、お坊さんが非常に身近に感じられるのも面白い。それぞれの方のTwitterIDは以下の通り。

秋田住職 <http://twitter.com/mitsuhiokoakita>
應典院 <http://twitter.com/outenin>
今城良瑞さん <http://twitter.com/ryozui>
松下弓月さん http://twitter.com/yuzuki_m

【ネット世代】

情報化が進み、インターネットを使いこなす世代を指す言葉。主に1977年以降生まれを言う。パソコンや携帯電話に依存する度合いが高いが、独自のデジタル活字文化を生んだともされる。さらに、物心ついたときから携帯電話やインターネットに触れてきた世代をデジタル・ネイティブとも呼ぶ。彼らは、現実世界での出会いとネットでの出会いの違いにこだわらず、リアル／バーチャルの境界

をほとんど感じていない。さらには、年齢や肩書きにもこだわらないとも言われている。座談会参加者のなかでは、松下さんがこの世代に重なる。

【Ustream (ユーストリーム)】

アメリカで生まれた動画共有サービス。誰でも無料でライブビデオ(ネット生中継)を行ったり、作成した動画を投稿して共有することができる。政治家の選挙活動や、アーティスト・芸能人のファンとの交流などにも利用されている一方で、日本では、何気ない日常風景や会話を中継する『ダダ漏れ』と呼ばれる生放送もさかんで、動画視聴者とのチャット機能を使ったコミュニケーションにも活用されている。

今回の座談会も、主に松下さんが運営する「お坊さんと仏教に関するイベント」を中継する『『ダダ漏れ坊主』というチャンネルを利用してネット生中継が行われた。録画も残されており、ネット上で閲覧可能。
<http://www.ustream.tv/recorded/7674992>

ソーシャル・キャピタルと宗教への問い

トークサロン「まちと宗教の密かな関係」から
浮かび上がったもの

1 社会貢献する宗教

宗教研究でアクチュアルなトピックの一つに、「宗教の社会貢献」がある。議論の焦点となるのは、世俗化した社会における宗教の公共的な役割である。一方において、個人的なかかわりを特徴とするスピリチュアリティ文化が流行し、他方において、反社会的な事件を起こすカルト宗教が世間の注目を集める。宗教不信の時代に、公共的な宗教の輪郭をどのように描けるだろうか。こうした問題関心が「宗教の社会貢献」研究の背後にある。

2009年12月に出版された稲場圭信・櫻井義秀編著『社会貢献する宗教』（世界思想社）では、宗教者・宗教団体が実践する様々な社会貢献活動が広く紹介されるとともに、現代社会における宗教の公共的な役割について多面的に考察されている。編者の一人である稲場圭信氏（大阪大学准教授）をゲストとするトークサロン「まちと宗教の密かな関係」が、2010年5月27日に應典院で開催された。ホストは関西学院大学准教授の関嘉寛氏である。

2 ソーシャル・キャピタル

トークサロンは、宗教的利他主義の研究を専門とする稲場氏の問題提起から始まった。稲場氏によれば、現代の都市社会は流動性が高く、絶えず新しい環境に適応すべく学習することを求められる。社会学では、社会的な規範を内面化し社会適応すること「社会化」(socialization)というが、流動性の低い社会では青年期に社会化を達成すればあとはそのまま生きていくことができたが、流動性の高い社会では青年期を過ぎても環境が変わるたびに新たに社会化する必要がある。そのため、現代人は生涯にわたって終わることのない社会化のプロセスを生きなければならず、非常にストレスフルな状況に置かれている。また、現代社会は「個人化」社会ともい

われ、リスクを個人として引き受けることを求められる自己責任の社会である。自己責任が問われる社会では、評価のまなざしが強くなり、身近な他者に気を許せなくなる。一番わかってもらいたい相手に評価のまなざしで見られるということはきつい。現代社会では、「社会のつながりがはまつれてゆく」と稲場氏は指摘する。

社会関係の解体はグローバルな課題でもあり、組織や集団の「信頼」「規範」「人と人との互酬性」を意味する「ソーシャル・キャピタル」(social capital)概念への注目が近年高まっている。ソーシャル・キャピタルの蓄積が高い地域社会では、自発的な市民活動が盛んで、思いやりにもとづく支え合いの行為が活発化することで、社会の様々な問題が改善できる。英国では、ソーシャル・キャピタルの源泉として宗教が注目され、調査報告書も出されている。しかし、稲場氏によれば、日本文化のなかでは「宗教がソーシャル・キャピタルとして機能するコンテキストが弱い」。

稲場氏は、現代の日本社会を「思いやり格差社会」とらえる。「思いやり格差社会」とは、人々の持つ思いやりの度合いの格差が広がり、思いやりを持つ人と持たない人に分断された社会を意味する。偽装・汚職事件にあらわれる大人たちの思いやりのなさは、子どもたちにも影響する。小学生の思いやり意識を調査した結果によれば、1970年代～1980年代に低下し、以後ずっと低いままだという。子どもたちに思いやりを持つように説教するだけではダメで、実際に行動して示す実践者、ロールモデル(お手本)との接触が思いやりを育むためには不可欠である。そのためには、実際に社会貢献活動をおこなう宗教者が果たすべき役割は大きいのではないかと稲場氏はいう。それが「まちに生きる宗教」に期待される役割である。

3 宗教への問い

稲場氏の問題提起に対して関嘉寛氏は、「宗教は場を作ることができるといわれるが、なぜ宗教は場を作ることができるのか?」「宗教のステークホルダーは信者に限定されるという閉鎖性があるのではないのか?」という問いを投げかけた。それに対して、稲場氏は、土



應典院木曜寺子屋サロン「circolo」
まちづくりオープンゼミナール
「まちの生きづらさを考える
—思いやり格差の視点から—」

2010年5月27日(木)
主催●應典院寺町倶楽部

ゲスト
稲場圭信 (大阪大学大学院人間科学研究科准教授)
ホスト
関 嘉寛 (関西学院大学社会学部准教授)

地とお金を持つ日本の宗教にはまだまだ力があると、それを動かしていく人材が大切と答えた。宗教の閉鎖性については、どれだけ宗教が開かれていくかという課題があるが、スピリチュアルな関心を持つ人々にうまくアピールして活動する可能性を示唆した。宗教の閉鎖性については、フロアからも宗教がどれくらい開かれるべきかを問う声が上がし、やはり超越性は保持すべきではないかという意見も出た。

最後に、應典院の秋田光彦住職から宗教とNPOの関係についてコメントが出された。秋田住職は、個人の喪失体験がきっかけで社会活動に参加する、そのための仕掛けとしてNPOがあると、その活動において表出されるスピリチュアリティに注目する。そのようなスピリチュアルな感性を育成する上で、伝統的な宗教の時間感覚・身体感覚が役立てられる可能性を秋田住職は指摘する。だが、教団としての社会貢献を考えると最後は教義とどう折り合いをつけるかが問題になる。秋田住職によれば、野宿者支援や自死遺族の支援は、教義が通用しにくくなる場面であり、究極的には活動が教義を超えることができるかどうか問われることになる。

4 社会化のダイナミズム

宗教の社会貢献で問われるのは、宗教の「社会化」である。聖俗二元論の立場をとれば、宗教は聖なるものにかかわるもので、超然と世俗の雑事から距離を置くことが望ましいということになる。だが、宗教もまた市民社会を構成するアクターのひとつと考えると、宗教は教団としての宗教的目的のためだけでなく市民社会の公益性のためにも活動することが求められる。そのとき、宗教が市民社会の規範と慣習を学習し、環境に適応する社会化のプロセスがはじまる。そのプロセスは、宗教が市民社会に迎合するという単純なものではなく、宗教が歴史的文化的に担ってきた役割を市民社会の観点から再発見しつつ、市民社会における宗教ならではの貢献を探索するものとなるだろう。

市民社会に宗教が積極的に参入するとき、秋田住職が指摘した

ように突き詰めると教義の問題に行き当たる。ヒューマンリズムをはじめとする市民社会の理念と宗教的理念が衝突するとき、どうするのか。その衝突のなかから新しい市民宗教が生まれることもあるのかもしれないが、伝統的な宗教的理念を譲れないままに社会化のプロセスを続ける宗教も存続すれば、結果として多様な価値の共存という市民社会の理念に寄与することにもなるかもしれない。社会学者の塩原勉氏は、ポスト近代のダイナミズムを異質な要素が対立しつつ相互補完的に機能する「対抗的相補性」という概念であらわしている。頑固な宗教が頑固なままで社会化のプロセスを続けることで対抗的相補性が作用し、市民社会の充実につながることもあるだろう。

5 遊びの視点

ところで、現代社会において「社会化」が問われるのは宗教だけではない。CSR(企業の社会的責任)として、企業も市民社会のアクターとしての責任を問われているし、大学で研究する研究者もまた、市民社会における責任を問われる立場にある。シニカルな見方をすれば、企業や大学の社会貢献活動は、ブランド・イメージを売り込むための宣伝に過ぎないともいえる。だが、たぶんそれだけでどどまらないのは、社会的な活動は圧倒的に面白い経験であって、参加しているうちに自分の価値意識がひっくり返るようなところがある。組織が変わらなくても、「私」が決定的に変わってしまう。自己が変容してしまうことの面白さ。他者の不確実性を楽しむ感性。要は、社会化のプロセスに生起する「遊び」の部分である。

社会心理学者のG.H.ミードは、社会化の過程において、「ごっこ遊び」などの「遊び」が決定的に重要であることを指摘した。社会貢献という言葉はいささか硬すぎて、その面白みを伝えそなっているのが惜しい。そして、じつは自己の変容はそもそも宗教が得意としていたところだったのではないだろうか。ソーシャル・キャピタルとしての宗教の可能性を考えると、この意味での宗教の面白さに期待したい。

WORKS

秋田光彦

10年1月から7月まで、大蓮寺と應典院で起きた様々な動きを、レポートします。

法輪は



震災15周年記念法要も。 震災世代が、社会のり・デザインを語る。

應典院の1月はコンズフェスタの月間ですが、今年は阪神・淡路大震災15年を節目として、震災世代によるさまざまな場が設けられました。

とりわけ、1月17日当日には、應典院本堂では、寺子屋トーク「+socialの編集者たちが語る」を開催。震災当時、大学生で、今、一線で活躍する4人の30代が、現場で得た学びや気づきをどのように活かしているのか、ソーシャル・イノベーションを共通

テーマに語り合いました。

また、それに先立ち、私が導師となって震災犠牲者追悼法要をつとめ、その後には、應典院の推進力ともなった震災世代への思いを法話として語りました。確かに「あの日」を起点として、日本の若者たちの生き方はシフトを変え、コミュニティとのつながりも変化していきました。改めて、應典院の原点を再確認する場となりました。

103年目の母の日。 亡き人とであいなおし、 としての場。

1908年、米国で、亡き母をしのぶメモリアルとして発祥した「母の日」から、今年が103年目。同志社大学の尾角光美さんが代表の、NPOリヴオン(Live On)が主催して、「103年目の母の日」が、5月5日應典院で開催されました。

当日は、ご本尊を背に、文集に発表された、母を追慕する手紙を、3人の書き手自身が朗読、死因は自死や病死などさまざまであり、その年齢も50代や30代とあまりに若いものでした。亡き母に対して「今」だから言えること、さらには年々変わる気持ち、あるいは変わらない想いを、一言一言を選びながら言葉にしていました。

その後、私が「悲しみにつながる」という講演を行い、参加者全員で「たいせつなものをこばにする」ワークショップを行いました。ゲストとして上田假奈代さんが、自作の詩を朗読してくれましたが、その一遍のように、「一生の時間のなかで あたらしいのちにてあう経験は であいなおし」を体現する、深く出会うための場となりました。

宗教の社会貢献。 学会で、お寺の社会活動を報告。

大蓮寺、應典院における社会活動を、2つの学会の研究会で報告してきました。4月13日は、宗教と社会学会主催の研究会「『社会貢献する宗教』書評会(関西学院大学)にて、また同26日には宗教倫理学会の「格差社会と人間の危機」研究会(龍谷大学)で、それぞれ私から発表しました。とくに前者は、同書の編者である北海道大学

の櫻井義秀さん、神戸大学(現大阪大学)の稲場圭信さんも同席され、活発な議論となりました。

またこれがご縁となって、来る9月4日には主幹の山口洋典が日本宗教学会にて、「宗教と社会貢献」シンポジウムのコメンテーターとして出講することとなりました。

1月17日



寺子屋トーク57「+socialの編集者たちが語る～思いをつなぐしくみ・地域に根ざすしかけ」

ことばくよう。 「あの日から15年の手紙」を送ってください。

コンズフェスタのもうひとつの企画「ことばくよう」は、やはり震災15年を機に、「死者供養」をテーマに、アーティストとともに創り上げました。さまざまな人から寄せられた生と死にまつわる手紙を題材に、供養とはなにか、想いを引き取るとはどういうことか、そしてそれを通してお寺が果たすべき役割について、詩人・上田假奈代さん、美術家・岩淵拓郎さんが中心となって、4つの枠組みで場が積み上げられていきました。

12月末より手紙の募集を開始、應典院内での展示、また詩作のワークショップなど開き、1月31日には、表現パフォーマンスとして「浄梵の火に見えるもの」を実施。大蓮寺本堂で法要を行い、一枚一枚の手紙を、浄梵にくべ、供養しました(写真は、手紙募集のチラシ)。「ブラックボックス化した供養を表現をとおして再構築し、そこから逆にさかのぼってお寺や宗教の社会的な機能を考えてみることを試み」(岩淵さん)しました。



「ことばくよう」チラシ

1月16日～31日



7月18日

「遺族サポートとお葬式」(ゲストは橋爪謙一郎さん)

グリーンサポートとしての葬送。 エンディングセミナー2010、開催しました。

大蓮寺・應典院の夏のエンディングセミナーが、今年も『遺族』をどう支えるかをテーマに開催、グリーンサポートとしての葬送について、3つの講座を実施しました。

セミナーは7月10日、NPO法人エンディングセンター代表で、東洋大学教授でもある井上治代さん、7月18日、ジー・エス・アイの代表で、「お父さん、『葬式はいらない』って言わないで」著者である橋爪謙一郎さん、7月25日、自殺対策に取り組む僧

侶の会代表で、浄土真宗本願寺派僧侶である藤澤克己さんがそれぞれ講演と、また私とのトークで進めました。毎回60名前後に参加があり、関心の大きさが窺えました。

少子化さらに無縁化が進むと、死者と遺族の関係にも大きな変容を来し、「遺族なき供養」という事態が拡大していきます。三者三様の切り口でしたが、いずれも時代を見据えた内容で、新たなコミュニティ

5月5日



文集『もし届くなら～103年目の母の日』を朗読する尾角さん

による支えあいの重要性を痛感しました。なお、今回のセミナーは、公益財団法人JR西日本あんしん社会財団の助成のもとで開催いたしました。

お寺からのお布施 NPOに「浄財」を提供する、 大蓮寺の「自然賞」が創設。

■信の共同体が地域を支える

「日本には寄付文化がない」と言われてきました。しかし、二連の公益法人制度改革の議論によって、2008年12月1898年制定の民法34条が改正されました。既に1998年の特定非営利活動促進法（NPO法）以降、法人格ごとに設定された税制優遇措置という枠組みを刷新することへの議論は高まりを見せていたことも影響し、公益性の判断は100年以上続いていた「官」による許認可主義から脱することにになりました。阪神・淡路大震災以降、人々の志が社会を変革するという実感が広がったことに加え、国所管の財団法人等による相次ぐ不祥事が重なった結果です。

▼島田裕巳さんの「葬式は、要らない」のベストセラー以降、葬式や墓、布施など寺にかかわるカネの問題が取り沙汰されている。文藝春秋から週刊ダイヤモンドまでこぞって「布施の相場」を取り上げ、お盆の最中にNHKは、「自分らしい葬式」について公開番組を放送した。「戒名料」に対する全日本仏教会の見解を、スタジオのタレントが「建前だ」と晒す。

▼昔から、葬式無用の声はあった。家族や地域、会社の力も衰退したのだから、人生儀礼はある意味簡素化していくのも無理はない。直葬も、無縁化社会における一つの選択肢だといわれれば、そうかもしれない。しかし、今、吹き荒れる葬式批判は、多くはカネの問題に同義であり、「そんな高い買い物は要らない」と合理化の大合唱を招いている。これにトドメをさしたのが、イオンの僧侶斡旋サービスだろう。同社のホームページには、「戒名料」の目安も堂々と掲載されている。

▼高度成長期以降、日本人は、自分たちの生活文化を「消費者」としてとらえてきた。医療も教育も福祉も、年齢や所得、嗜好に応じて、さまざまなサービス商品が用意されていて、それを選ぶことで「生涯安心」を買ってきた。気に入らなければ、クレームを言って乗り換えるだけ。この不景気な時代、消費者的に考えれば、葬式も戒名も「高額商品」のひとつに過ぎないのだから。

▼もはや葬式仏教を成り立たせた、日本人の生活文化は壊れている。というより、この期に及んで、まだ葬式仏教の本質とは数日間の葬送儀礼のことだと理解している僧侶の何と多いことか。死にゆく人の生涯全体を見据えて、あるいは遺族のグリーフに向き合って、本当の葬式仏教が再生しない限り、希望はない。(MA)



人が個人に対して何らかの施しが行われてきたためです。とはいえ、日本でも多少なくとも近代化以前には、治水や道路や架橋など、いわゆる地域整備の土木工事などの公共的仕事が多くの寄付によって成立してきました。また、江戸時代には「富士講」や「お伊勢講」はもとより、頼母子講や無尽と呼ばれる相互扶助の地域金融制度が盛んとなっていました。

日本の寄付(的)精神が、西洋の寄付文化と異なるのは、民に根ざした宗教性の相違です。事実、日本では神仏に対して各々の財が捧げられてきています。つまり地域の暮らしを支える文化として、寄付と言わない寄付(的)習俗が維持・継承・発展してきました。すなわち、洋の東西を問わず、「信」の共同体が地域を支えてきたのです。

■勧進文化の再興

「誰にも迷惑をかけずに死にたい」。無縁

社会と呼ばれる今、こうした声がよく取り上げられています。しかし、われわれは多くのおかげで生き、「お互い様」の関係で、生かされています。とはいえ、「誰にも迷惑をかける生き方などできるはずがない」と言ってしまうのは無責任が過ぎます。ただし、大蓮寺・應典院の取り組みは、無縁化が叫ばれる現代社会において、互いのつながりを見出す契機を生み出し、続ける実践を愚直に重ねて来ているという自負があります。

このような時代に呼応するかのよつに、この7月、大蓮寺によって新たな事業が展開されることになりました。それが、2002年に建立された生前個人墓「自然」の志納金を基金とした、エンディング文化創造に寄与するNPO・個人を支援する「自然賞」の贈呈です。第一回は、桜葬などに取り組む「エンディングセンター」(井上五代代表)に贈られました。井上さんは、「貫して市民の立場から家族問題として葬送に関する実践と研究を重ね、今後の葬送や供養のありかたに大きな

影響を与えています。7月10日、應典院で開かれた寺子屋トークに先だって執り行われた贈呈式の後、井上さんは、「核家族の最晩年の姿は『独居』。未婚・子どももないライフコースを選ぶ人も増加、エンディング期いかに支援するかが現代社会の課題です。血縁から結縁へ墓を核としたサポートネットワークの構築を目指して20年間活動してきた私たちが、同じ志をもつ社会活動する大蓮寺の自然賞に選ばれて、大変光栄に思っています」と語られました。

見方を変えれば、これは仏に対してなされた寄付からの寄付、すなわちお布施からのお布施です。この時代にこそ、お墓を縁に集い、縁を結んだ方々によって、新たな世直しと人助けのうねりが起きて欲しい…。それが「自然賞」に埋め込まれた趣旨です。それは新たな「志」に基づく「信」の共同体による「勧進」文化の再興と言っても過言ではありません。

(山口洋典)

サリュ・スピリチュアルvol. 2
2010年9月10日発行

編集長: 秋田光彦
編集: 山口洋典・池野亮光
写真: 山口洋典

発行: 大蓮寺・應典院
大阪市天王寺区下寺町1-1-30
(〒543-0076)
電話06-6771-7641
Email: info@outenin.com
URL: http://www.outenin.com

